

1. 研究課題名：E-1002 地域住民の REDD へのインセンティブと森林生態資源のセミドメスティケーション化

2. 研究代表者氏名及び所属：

小林 繁男
(京都大学)



3. 研究実施期間：平成 22～24 年度

4. 研究の趣旨・概要

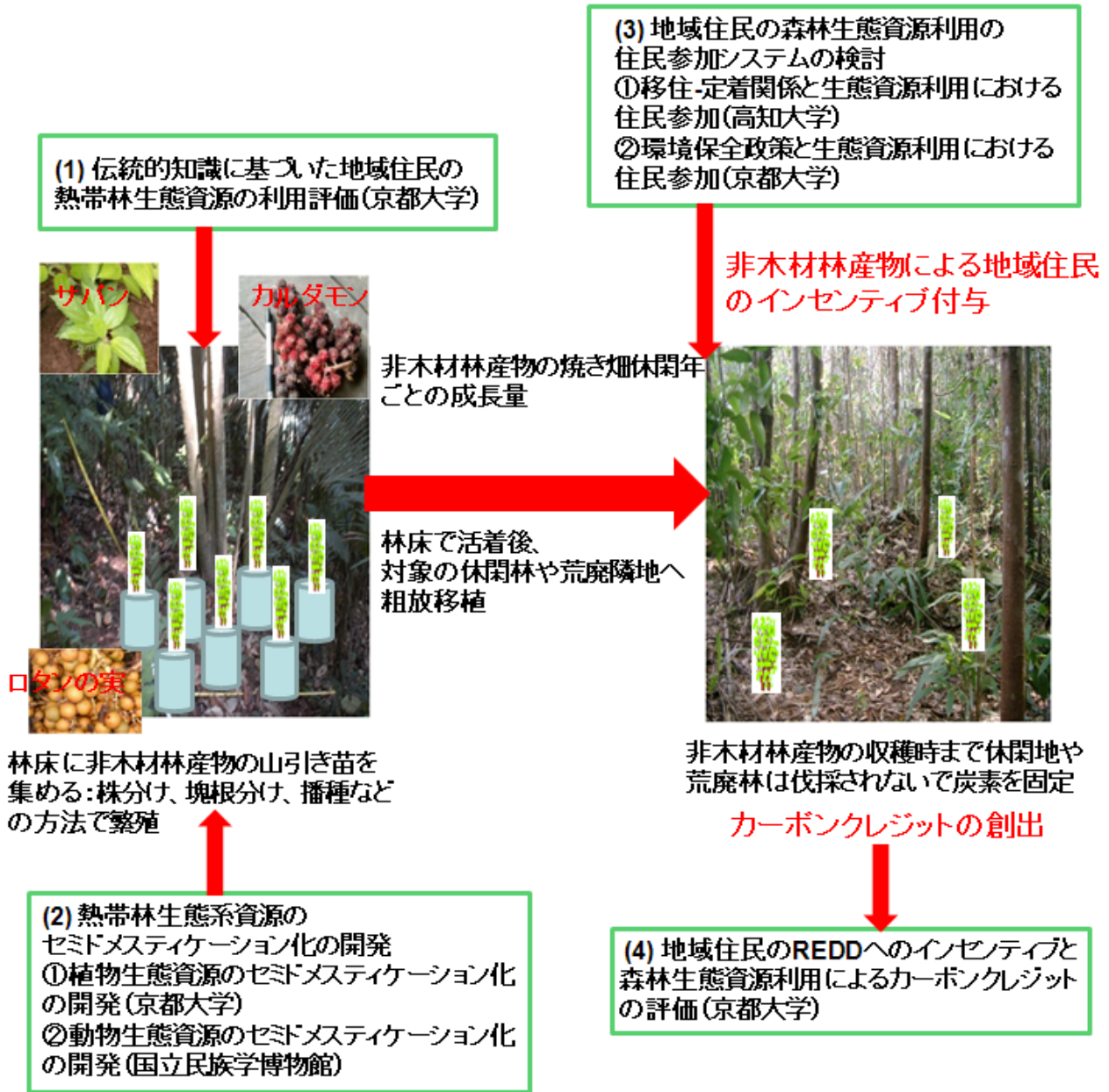
COP13 で提唱された REDD*においては、地域住民の森林生態資源利用に対するインセンティブが重要です。そこで、伐採跡地、二次林、焼き畑休閑林など熱帯林二次植生における地域住民の生態資源の利用実態把握を通して、地域住民の REDD に対するインセンティブを解明します。また、住民参加を伴う森林生態資源のセミドメスティケーション化（半栽培化）による持続的な生態資源管理と、それに伴う森林再生とカーボンクレジットの評価の研究を行います。森林生態資源のセミドメスティケーション化により地域住民へインセンティブを付与することは、REDD が有効に機能する一つの方法であり地球環境政策に貢献できます。

*REDD：途上国における森林減少・劣化に由来する温室効果ガス排出削減 (Reducing Emissions from Deforestation and forest Degradation in developing countries)

5. 研究項目及び実施体制

- ① 伝統的知識に基づいた地域住民の熱帯林生態資源の利用評価（京都大学）
- ② 熱帯林生態系資源のセミドメスティケーション化の開発
 - 1) 植物生態資源のセミドメスティケーション化の開発（京都大学）
 - 2) 動物生態資源のセミドメスティケーション化の開発（国立民族学博物館）
- ③ 地域住民の森林生態資源利用の住民参加システムの検討
 - 1) 移住-定着関係と生態資源利用における住民参加（高知大学）
 - 2) 環境保全政策と生態資源利用における住民参加（京都大学）
- ④ 地域住民の REDD へのインセンティブと森林生態資源利用によるカーボンクレジットの評価（京都大学）

6. 研究のイメージ



生態資源のセミドメスティーケーション化と地域住民のREDDへのインセンティブ

セミドメスティーケーション化により、地域住民が焼き畑ローテーションを4年間から7年間に延長とした時の炭素固定量

$$0.489 \text{ (m}^2\text{/ha/year)} \times 15 \text{ (m)} \times 0.5 \text{ (炭素率)} \times 0.6 \text{ (比重)} \times 3 \text{ (year)} = 6.6 \text{ Ct/ha}$$